# 英国ロマン派第一世代

## ― ColeridgeとSoutheyのNapoleon観について ―

高橋　優身

**要　旨**

英国ロマン派第一世代に関して、Napoleonがヨーロッパを君主制から解放し、フランス革命の大義、自由・平等・博愛の理念を具現化してくれる人物との彼らの熱のこもった思いは、従来の研究では1798年の「Napoleonによる」スイス侵攻によって無残にも打ち砕かれ、以後彼らはNapoleonに対して関心を抱かなくなったとされている。しかし、英国ロマン派第一世代、特にColeridgeとSoutheyを中心として検証した結果、彼らのNapoleonに対する想いは、1802年の終身統領就任に至るまで、あるいはそれ以後の皇帝即位までも揺れ動き、Napoleonの「実像」から離れ、自分たちの「想い」が作り上げたNapoleonという「架空の人物」に自分たちの望み・願いを託していたことが判明した。

**キーワード：英国ロマン派、コウルリッジ、サウジー、ナポレオン、フランス革命**

第一執政に対して敵意の感情は抱いていない。すなわち、もし抱いているとしても、それは、些細な偏見や僻みであり、その偏見や僻みは当然、自分個人に対して自惚れて希望を抱いていた人物、そして自分個人に対して哀れにも失望してしまった人物から発せられる。

Coleridge, September 1802[1].

**【目的】**

フランス革命（1789-1799）によってもたらされた期待と幻滅と恐怖、それでも革命の大義を信じる英国ロマン派第一世代は、Napoleon（1769-1821）の登場によって、彼こそヨーロッパを君主制から解放し、革命の大義である自由・平等・博愛という理念を具現化してくれる人物と映り、期待し、それぞれの望み・願いを彼に託した。しかし、その後、彼が行った事柄にあまりにも落胆しすぎたため、あるいは自らの保身のためなどの理由によって、彼らは後の著作の中で、自分の「想い」を隠すために「歴史的事実」をも歪曲して伝えたのである。従来の研究者たちも、「Napoleonによる」1798年のスイス侵攻によって、彼ら英国ロマン派第一世代のNapoleon熱は一気に冷めてしまったとして、彼らとNapoleonとの関係を一切無いものとして省みていない。果たして、人の「想い」はそんなに簡単に断ち切れるものであろうか。自分の「望み・願い」を託した「想い」をそんなに簡単に捨てられるものであろうか。そうした英国ロマン派第一世代のNapoleonに対する「想い」をColeridgeとSoutheyを中心に検証することで、より幅の広い「読み」が可能となり、英国ロマン派研究の一助となるであろう。

**【ロマン主義の典型】**

Napoleonをめぐる同時代の論争に特徴があることを前提とすれば、そして論争の中や論争が行われた過激な言葉の中に投じられたと感じられたものに重要性があることを前提とすれば、英国ロマン派詩人の時代にNapoleonが描写される事柄に関して、批判的な関心がほとんど向けられていなかったことは驚くべき事である。Byron（1788-1824）が唯一の例外で、Napoleonに対する彼の関心については、今までに数多くの批評

（所　　属）
山梨県立看護大学

（専攻分野）
英文学

家たちによる先行研究によって十分に提供されてきている。しかし、ロマン派第一世代がNapoleonに対して魅惑されていたこと、特に1798年から1802年にかけて（常勝将軍から1799年にブリュメールのクーデターで第一執政に就任、さらに1802年に終身統領となるまで）魅惑されていたことは、絶えず控え目に扱われてきた。それは、フランス革命の歴史的出来事の運動性よりも、その中心性のほうに重点を置くが、英国ロマン派詩人・著述家たちがヨーロッパの歴史へ参画した困難な時代は、1790年代後半のある時期に終止符が打たれたと規定するロマン主義の典型、すなわちWordsworth（1770-1850）の*The Prelude*（『序曲』1850年出版）やColeridge（1772-1834）の'France: An Ode'（「フランスへのオード」1798年）のような作品に強く示されている典型の方が好まれているからである。例えば批評家のAbramsは論文「英国ロマン主義：その時代精神」の中で次のように論じている。「18世紀の最後の10年には、フランス革命のあらゆる周期、De Quinceyが『壮麗な祝祭の時代』と名付けたものから、1799年11月10日のクーデターまでが含まれていて、そのクーデターの時は、数少ない頑固な同調者以外の内外共のすべての人にとって、裏切られたとの想いが起きたようであり、その後Napoleonという不吉な前兆がヨーロッパを覆い始めた[2]。」この時期に、ロマン派の第一世代の作家たちは、「真の世界、それこそ私たちみんなの世界」（*The Prelude* x, 725-6）の歴史的あるいは政治的事柄への参画から身を転じて、フランス革命によって喚起され、それに続いて起きた出来事によって虚しくなった望み・願いを、想像力を通して内面化していった、とAbramsは提案し、「望み・願いは人類の歴史から一人の人間の心へと、戦闘的対外活動から想像の行為へと移っていった」[3]と述べている。

このように未だに影響力を持っているロマン主義の典型は「歴史」から生じたものだが、そのためにNapoleonはそれほど重要でない人物、それほど興味・関心が湧かない人物となってしまっている。少しでも言及されている場合でも、彼の立身出世・名誉栄達はAbramsが「恐怖政治（1793-94）から始まった連続する凶事」[4]と呼んでいるものの頂点として見られている。その恐怖政治こそ、ロマン派第一世代がフランス革命に対して幻滅感を味合わされたものだった。例えば批評家のPrickettは次のように、Napoleonに対するロマン派第一世代のこうした反応の典型を何度も繰り返し提示している。

> 最終的に価値基準を決定的に一変させ、そしてWordsworthとColeridgeの二人を名ばかりの似非保守主義者にさせているのは、単なる言語学的な、あるいは審美的な熟慮のせいではなくて、はるかにもっと単純で、二人にとっては衝撃な事実、すなわち、王と王妃の処刑、恐怖政治そしてNapoleonの不変の立身出世・名誉栄達のせいであった。そしてNapoleonに関しては、軍国主義の賛美の方が、旧制度下で見られたどんなものよりも悪いものであったことである[5]。

**【1798年の侵攻】**

Napoleonに対するロマン派の反応を、このように回顧的に単純化することを助長させた要因の一つは、ロマン派第一世代の作家たちが同じような過程に巻き込まれたことにある。このことは、Napoleonがその経歴の初期の段階にあたる1798年にフランス軍を率いてスイスに侵攻したという、拭い去れない誤信、恐らくはNapoleonの攻撃的で帝国主義的な性格を示すはっきりとした証拠の一つとしての誤信によって明瞭に例示されている。Abramsによると、まさに、この侵攻こそ「Coleridgeの革命に対する、ためらう、消えやらぬ望み・願いを粉々に打ち砕き[6]」、彼の'France: An Ode'での「自説取消」を促すことになった幾分かは、この詩における「自説取消」のクライマックス的位置取りのせいで、そして幾分かは、Wordsworthのこの主題に関する後の陳述、すなわち1806年のソネット、*The Prelude*、*The Convention of Cintra*（『シントラのしきたり』1809年）そして1821年12月4日の手紙

によって、フランス軍のスイス侵攻は、革命が進行中の出来事の中で頂点に達する「凶事」として確定してしまった。Napoleonは実際にはこの侵攻に参加していなかったが、有名な批評家たちはWordsworthやColeridgeに追従し、Napoleonがその侵攻において指導的な役割を果たしたと述べている。例えば、De Selincourtは Wordsworthのソネット'Thought of a Briton on the Subjugation of Switzerland'(「スイス従属について一人のイギリス人が思うこと」)について「Napoleonの最初のスイス侵攻は1798年であった[7]」と注解しているし、Erdmanは「WordsworthとColeridgeは1798年のスイス侵攻によって、この新しいOrc(Napoleon)に対する自分たちの幻滅感を表明した[8]」と述べているし、そしてWoodringは「1798年初めのBonaparteによるスイス侵攻が不確実性に終止符を打った、あるいは少なくとも、この優柔不断な作家が二度と再び越えることの無かったフランスに関する境界線を敷くことになった[9]」と論じている。しかしながら、Woodringは別の著書の中で、Napoleonのスイス侵攻を信じる根拠をそれとなく提示している。「Bonaparte将軍は北イタリアからオーストリア兵を駆逐しただけでなく、スイスをも従属させた[10]」と述べている。ここでWoodringがNapoleonの肩書きを「将軍」としていることと、その後にエジプト遠征や1799年のブリュメールのクーデターを起こし、「第一執政」に就任し、1802年終身統領になり、1804年皇帝となるとの、Napoleonの出来事を年代順に配列していることから、このスイス侵攻はNapoleonが実際に指揮した1802年のスイス侵攻を指しているのではなく、1798年のスイス侵攻に言及しているのは明らかである。しかしながら、Woodringが「従属」という言葉を使用していることは、彼の歴史的な主要情報源がWordsworthの1806年制作のソネット'Thought of a Briton on the Subjugation of Switzerland'であることを示している。そのソネットでは、Napoleon的な暴君が自由をそのアルプスの支配地から追い出している(5-7行)。しかし、Maxwellが簡明だが非常に有益な論考[11]の中で示しているように、このソネットやスイスの従属に関するその他の記述において、Wordsworthは歴史的出来事に対する自分自身の反応を再現しているだけでなく、多数のこうした出来事、特に1798年のスイス侵攻と1802年のスイス侵攻とを融合させている。Maxwellは問題をより明確にするために、Wordsworthが幾度も繰り返す回顧的な試みを検証し、それぞれ異なる歴史的出来事に対する詩人の反応の複雑さや曖昧さを明らかにしている。そして1802年以降でしか有り得ないと論述している。

> 特に抜きんでた敵としてのNapoleonの主要な役割は、さらにスイスの独立の破壊者としても見なされるようになり、さらに、フランスとスイスの交戦は実際には1798年に遡るので、輪郭がぼやけてきた。そしてこのソネットの中で歌われている極めて生き生きとした叙述は、ある特定のいかなる歴史的出来事にも当てはまらないが、1798年まで引き返す要素を含むようになった。しかし、Napoleonが1798年当時、まだ就任に至っていなかった終身統領の地位を奪うまでのことはしていない。[12]

Maxwellの論文は、ロマン派第一世代と現代の批評家たちが行ったNapoleonという人物像に対する回顧的な価値・名声の低下の特徴を示す二つの魅力ある過程を正確に述べている。Wordsworthは後の進展に従って、自分自身の過去の出来事だけでなく、ヨーロッパの「歴史」まで自分に都合の良いように書き換えている。「過去」に対する自分の見解、そしてNapoleonの立身出世・名誉栄達に対する自分の見解を、Napoleon時代(1814年退位)およびワーテルロー(1815年)以後の時代の継続する圧迫・苦悩によって、特に、1802年以降にNapoleonが引き受けるようになった「特に抜きんでた敵としての主要な役割」によって作り直している。さらに、Wordsworthが自分自身の反応だけでなく、

Napoleonの権力上昇とスイス侵攻とを再公式化し、再構想化したことによって、「Napoleonによるスイス侵攻」という現代の神話が育まれてきたのである。この神話が伝播されることによって、批評家たちはNapoleonを、権力の簒奪により1799年に革命に終止符を打った侵略者とすることで単純化し、退出させることで英国ロマン主義の筋書きから外してしまうようになったのである。

**【エジプト遠征】**

1798年から終身統領に就任する1802年までの間、ロマン派第一世代にとってNapoleonは重要な「架空の人物」であった。特にColeridgeとSouthey（1774-1843）は共に、私有財産や階級制度を認めない理想社会、パンティソクラシーを1794年にアメリカに建設しようとして、挫折した同志であったので、Napoleonをダシに使い、自分たちの政治的望み・願いを描き出し、政治的力と詩的力との関係を検証し、新しい形の指導者を研究・吟味した。ColeridgeとSoutheyは二人とも、1798年から翌年におけるNapoleonのエジプト遠征の熱狂的な注視者であり、Southeyは後にNapoleonによるエジプト遠征を「彼の偉大さと彼の栄光の時代[13]」と述べている。Napoleonによるエジプト遠征についてのイギリス人の捉え方・理解の仕方は次のようであった。

> 1798年のNapoleonによるエジプト遠征の独特な特徴は、軍事的侵攻として厳密な意味で描かれていたのではなく、むしろ文化的そして科学的な一大イベント、すなわち、現代の思考力が古代オリエントの神秘を解明する手がかりとなるであろう過程・作業の始まりとしてより一般的に捉えられていた。軍隊に加えて、Napoleonはフランス科学および芸術委員会の委員たちから成る科学旅団を召集した。その旅団の仕事は、技術的および戦略的助言を与えることに加えて、エジプトにおける科学運動を促進させること、およびエジプトの歴史および文化を調査・研究し、詳しい報告書を出版することであった。エジプト遠征は芸術と政治を進歩の旗印の下に置いた。オスマントルコの専制君主政権によって長い間奴隷状態に置かれた国民を解放し、エジプトを現代社会に仲間入りさせるだろう科学と統治機関をエジプトに供給し、そして科学を通して、朽ち果ててしまった芸術および結局は失われてしまった言語の重要性・価値を回復させ、取り戻すことが今回の遠征の目的であった。この遠征を通じてNapoleonはフランス革命の目的および偉業と同一視されるようになった。[14]

理想的な万民平等の民主的社会、パンティソクラシー建設という夢の仲間でもあった妻に宛てた1799年5月13日の手紙において、SoutheyはNapoleonのエジプト遠征を、1795年に立ち消えてしまったパンティソクラシー建設という望み・願いを自分の中に再燃させるものとして表現している。ユニテリアン派の宗教的扇動者が投獄されたことを嘆き悲しんだ後、Southeyは「今は邪悪の時代だ。私は英国の自由の墓碑銘を書くつもりだ[15]」と言明している。イギリスの政治状況を非難した後、次に彼は、既存のものに取って代わるべき統治機関としてNapoleonによって改革されたエジプトのことを考え、Napoleonによって改革されたエジプトはフランス革命の根本精神を恐らく具現化するものと見なしている。「おやまあBuonaparteは今、シリアに私たちの住まいを造ってくれている。完成すれば私たちは乳と蜜の流れる土地で、東方の陽光を浴びながら自由を満喫することになるだろう[16]。」ここでSoutheyは聖書の「出エジプト記」第3章第8節から「約束の地」を示す成句を借りているが、この時、非常に暗示的であるが、Coleridgeの'Kubla Khan'（「クーブラ・カーン」1816年出版）の最終の二行と響き合い、あるいは先駆けとなっている。

> というのも彼は神々が飲まれる甘露（honey-dew）を味わい、
> そして「楽園」に流れる乳を飲んだことがあるのだから。

'Kubla Khan'の創作年代は未定であるが、遅くとも1799年の10月とされている。この時期、ColeridgeとSoutheyはNapoleonに関する詳細な手紙を熱心にやりとりしていた。Southeyが「出エジプト記」の成句を使用していることから、この成句が3年前にパンティソクラシーを建設しようと初めに考えていたイングランド南西部にあるクアントック丘陵と結びついていたのと同じように、Napoleonのエジプト遠征に言及する場合に、Coleridgeの内輪の仲間たちではこの成句が既に通用していたことが推測される。Southeyの手紙はさらに、Coleridgeがこの詩を書いたときにNapoleon、特にエジプト遠征そのものを心に思い描いていたという議論に対して一つの示唆に富んだ証拠を与えている。「'Kubla Khan'はその基本構成において、政治家の権力と詩人の創造力とを対照させているという意味では政治的な詩であり、この詩は特に二人の独裁者、KublaとNapoleonに対して言葉が向けられている[17]」とRudichはかなり詳細に論じている。しかし、Rudichのこの詩に対する「読み」は、この時期でのNapoleonに対するColeridgeの見解を単純化しすぎて理解していると言わざるを得ない。なぜならRudichは次のように論じているからである。「1798年1月のNapoleonによるスイス侵攻は、ためらいや疑問から完全なる幻滅へとの決定的な転向を示し、Napoleonの後の経歴に対する今までとは逆の見解にと成り行く保守的傾向の出発点となった[18]。」確かに、もしもNapoleon＝Kublaという人物の描写の仕方が、Rudichが論じているように単に否定的なあるいは軽蔑的な描写の仕方であれば、この詩の最終の二行は、Napoleon＝Kublaという人物が政治的な法令を通しても実現できなかった「乳と蜜の流れる楽園」を、幻視者の潜在能力が想像力を通して建設することを暗示するものと「読む」べきであろう。しかし、この詩の「読み」の根拠を、1798年のNapoleonによるスイス侵攻との誤った信念に置いていることで、Rudichは'Kubla Khan'を書いた頃のColeridgeのNapoleonに対する、かなりの相反する感情を持つ、そして往々にして肯定的な態度を考慮に入れていない。この時期のNapoleonに関するColeridgeやSoutheyの著作を調査することで、二人にとってNapoleonがこの時代の「架空の人物」として非常に重要な人物であったことが例証されるだけでなく、'Kubla Khan'を「政治的な詩」として「読む」場合に、より十分に状況を理解することができるであろう。

**【Southeyと架空の人物】**

話を1799年に戻すと、10月18日にSoutheyは友人に、Napoleonのイタリア遠征やエジプト遠征を含む最近のフランスの戦役に対する自分の反応を熱心に書き送っている。「Massena（元帥）、Buonaparte（第一執政）、スイス、イタリア、オランダ、エジプト、みんな一度にだ！これこそまさに幸運の奔流だ！それは自分にとってまさに一服のガス状の酸化物であり、その力強い歓喜は今でも続いている[19]。」ガス状の酸化物とは当時の発見物で、Southeyは1799年7月12日の弟宛の手紙の中でその効能について「それを服用すると大声で笑い出し、手足のすべての指先まで興奮し、うずうずする。発見者は実に新しい楽しみを創り出してくれたものだ。今晩、試しにもっとやってみるつもりだ。服用すると気持ちが強くなり、大変幸せになる。すごく素晴らしく幸せになる[20]。」Napoleonの初期の経歴は、明らかにSoutheyの心の内に、力強さと素敵な幸福感と同類の感情を引き起こした。1799年の春にフランス軍がイスラエル北部の港アッカにおいて疫病の流行によって見る影もなくした後、Napoleonがアッカから退却したことに関する詩を書くことをSoutheyが思いついたのは、どうやらこの時期だったようである。1801年にSoutheyはこの案のことを思い出したが、初期の約束をNapoleonが成就できなかったことを嘆き悲しんでいる。「なぜこの人物は、偉大さと栄光に包まれながらアッカの城壁の前で倒れなかったのか。以前に自分は、その敗北に関する詩を書くように求められ、半ばその気になった。その理由はその敗北が私の心を真に痛めたからである[21]。」

**【Coleridgeと架空の人物】**

SoutheyとColeridgeは1799年の9月と10月における一連の手紙のやりとりの中で、Napoleonの特徴について考えている。Southeyは「注目すべきほど学究的に熱心で、人前では内気で無口である[22]」と述べ、Coleridgeは「彼の経歴と受けてきた教育はまさに賢者のものだ[23]」と言っている。自分の情報源によるとNapoleonはいつでも偉大な人物で、いつでも一番で、いつでもBonaparteである、とSoutheyは書き記している[24]。Coleridgeは、Napoleonのエジプトからパリへの劇的帰還の後、彼に対する賛辞に満ちあふれた返事を興奮気味に書いている。Erdmanが述べているように、「1807年頃の後になっても、フランス革命時時代の過激共和主義、ジャコバンに対する以前の共鳴の炎が、さらにフランス・カトリック教徒に対する以前の共鳴の炎さえもが、自説取消や不安・懸念のあらゆる言明にも関わらず再び燃え上がった[25]。」Coleridgeは1799年10月15日に、Southeyに無我夢中になって返事を出し、「不毛の荒れ地（キリストが40日間断食した所）での試練の後、この東方の救世主が再起し、栄光を手にすることができるかついて君はどう思う」と尋ね、「この言葉は神に対する冒涜になるかも知れないが、まったく実際に、自分の体の中に獣の霊が吹き込まれたのと同じだ、おおBuonaparte！親愛なるBuonaparteよ[26]！」とその感情を述べている。ここでColeridgeはNapoleonに対する自分のメシア的描写が、ただの誇張法にしか見えそうもないと意識してか、自分の感情の正直さ・誠意を力説しようと骨を折っている。この手紙の後半が明らかにしているように、ColeridgeがNapoleonに期待して登場させているのは、当時、英国のトーリー党を率いて反Napoleon派の急先鋒を務めていた小Pitt首相への対抗軸代表としての彼が占めていた地位に強く影響を受けている。小Pitt首相はColeridgeが後に『モーニング・ポスト』用の、プルターク風の対比列伝による小論において詳しく展開することになるNapoleonとは対照的な、正反対の人物であった[27]。そして小Pitt首相は、1800年1月と2月の同紙におけるColeridgeの議論の総攻撃にとって大変重要な人物となってくる[28]。SoutheyがNapoleon関連の出来事の一覧を興奮しながら書き記しているのと同じように、ColeridgeがNapoleonの名前を狂喜しながら呪文のように唱えていることから、彼のNapoleonの経歴に対する熱狂的な反応の程度が著しく窺い知れる。それはまさに、Southeyにとって「一服のガス状の酸化物」であったのと同じようにColeridgeのとっては、「獣の霊が吹き込まれた」のであった。

**【第一執政】**

フランス革命の理論的指導者Sieyès神父（1748-1836）と協力して成し遂げられた1799年11月のブリュメールのクーデターによってNapoleonが第一執政に就任したことは、SoutheyとColeridgeの二人を大いに失望させ、Coleridgeはそのクーデターを「忌まわしい悪行[29]」と呼んでいる。Southeyの友人が彼に手紙を送り、「君とBonaparteは今現在、どれだけ意見が同じなのか。私はあのコルシカ人を今まで好きになったことは一度もないが、今度こそあいつは私を怒らせてしまった[30]」と尋ねている。返信におけるSoutheyの過激な自説取消は、自分がNapoleonに対して心に抱いていた望み・願望の度合いを恐らく強調しているのであろう。「あのコルシカ人は私を怒らせ、そしてオスマントルコの藩侯たちをエジプトから放逐したことでも、今度の破廉恥な政体の罪滅ぼしとはならないであろう。Buonaparteのせいで私は反フランス・カトリックになった[31]」と書き記している。しかしながら、このように厳しい公然たる非難の中においても、SoutheyがNapoleonの新しい政体に対して、エジプトからオスマントルコの藩侯たちの専制君主的王朝を放逐したことを比較考量しているように、まだまだ曖昧な表現が残っている。

しかしColeridgeとSoutheyの二人の場合、ブリュメールのクーデターに対する彼らの即時の反応はNapoleonに関する完全なる自説取消、あるいは彼に関する自分たちの見解の終了宣言を示しているのではない。Coleridgeは『モーニング・

ポスト』に寄稿した一連の論説[32]の中で、自分のNapoleonに関する描写は様々で、錯綜していると述べている。ColeridgeはNapoleonを英雄的人物像と同時にまた、臆病で卑怯な戦線離脱者、すなわち「中世騎士物語の英雄」であり、同時にまた「逃亡者および主権簒奪者」と述べ[33]、さらに「進取の気性を持ち合わせ、非凡な才能に恵まれ、軍事的経験が豊富な、人望のある独裁執政官[34]」と呼んでいる。ColeridgeのNapoleonに対する二元的な揺れ動く描写は、この時期のNapoleonに対する彼の感情の交錯、すなわちNapoleonの「非凡な才能」、「熱望」および「政治的機敏さと中庸」に対する称賛と、そしてNapoleonの主権簒奪という行為に対するたまらない嫌悪とが混じり合ったもの[35]に幾らか由来している。1800年3月11日のレトリックを駆使した離れ業を演じている小論の中でColeridgeはフランスにおけるNapoleonの政体を支持して、力強い論を構築している。そしてその論を、自分の感情の交錯を驚くほど見事に要約し、さらにKublaの「たぐい稀な造化の奇蹟」を思い出させるイメージで締めくくっている。「主権簒奪でBonaparteは自分の正直さの急所を突き刺してしまった。そして彼の正直さは死んでしまった。そう、正直さが死んでしまったことは認めよう。しかし、彼の正直さが葬られて横たわる霊廟は世界の驚異・奇蹟の一つである[36]。」さらに、この一連の論考においてNapoleonを戦争が続く限り力強い者として、しかし平和が達成された時には弱い者として描写することによって、Coleridgeは『モーニング・ポスト』の和戦を望む編集方針を擁護している[37]。もし平和が達成されれば、Napoleonの専制政治はもっと民主的な形態の政体に道を譲るであろう、とColeridgeは論じ、さらにNapoleonは自分が行った平和の申し出に対しては誠実である、と喜んで信じ、あるいは少なくとも主張している[38]。

隠れているものを恐らく最も垣間見せているのは、1800年2月3日に英国下院で行われた小Pitt首相の演説を伝える『備忘録』中にあるColeridgeが記している二つの見解であろう。『備忘録』という私的性質を持つものなので、ここに記されている見解はColeridge自身の意見が表現されていて、ご都合主義、すなわちErdmanが『モーニング・ポスト』の記事に見出した「動機の取引[39]」はいささかも含まれていない。Napoleonの政体の特徴は軍事独裁政権であると小Pitt首相が発言したことに対して、Coleridgeは軽蔑的な反応を示し、「独裁だと。とんでもない。有望な特性以外に何があるんだ！[40]」と感嘆的な疑問を走り書きしている。同じ演説に対する二番目の覚え書きは、ColeridgeにとってNapoleonの価値が旧体制の君主支配に代わるべきものとしての彼の地位・身分と関係していることを示している。「あの人物は、Bonaparteを受け入れて雇ったBourbon一族のことを話題にすべきである[41]。」こうした覚え書きによって、ブリュメールのクーデター以後においても、可能性があって有望な人物としてのNapoleonに対する興味・関心そして意識があることが明示されている。

同じようにSoutheyも、ブリュメールのクーデターによってNapoleonの評判に対して与えられたダメージについて詳しく論じることを拒んでいるが、Napoleonに多面的な可能性があることを最も称賛的な言葉で力説している。Napoleonのせいで反フランス・カトリックになったと言い放ってから一ヶ月も経たない1800年の2月に、Southeyは次のように書き送っている。

> 彼の権力の独占を正当化するつもりは私にはない。そんなものは彼の好きなように利用させればよいし、利用すべきである。しかし、彼の過去の行状、すなわち彼の青年期について私が個人として知っていること、彼の行ってきたことについて世間の人たち全員が知っていること、彼が将軍として占めている地位・身分、彼が賢人として心に抱いている見解、連戦連勝の彼を平和の擁護者になさしめた思いやり・人情、以上のことを回顧し、再吟味すれば、彼はマケドニアのアレクサンドロス大王以来の、運命あるいは社会的事件が、行動するようにとこの世の中に送り出した最

も偉大な人物であると、私はためらうことなく断言する[42]。

Napoleonを暴君あるいは専制君主として切り捨て、彼の立身出世を、王の処刑と共に始まった一連の凶事の頂点と見るようなことはしないで、ColeridgeとSoutheyは二人共、その権力の行使が、公明正大でないその権力の強奪を正当化するような指導者としてだけではなくて、「非凡な才能の持ち主」、「知識の人」、「賢者」、「詩人」そして「平和をもたらす調停者」としても、彼の方を希望を持って見ていた。Napoleonは、Southeyが手紙の中で言及している「価値のない、役に立たないBourbon王家[43]」の一員でもないし、Coleridgeが小Pitt首相について描写している「温室内で種を蒔かれ、育てられた植物[44]」でもなく、むしろカリスマ的人物、すなわち「迷信や盲信そして熱狂の対象となる、様々な才能を有した、人を威圧する才能を有した、華々しい偉業を有した人物[45]」であった。この時期におけるNapoleonに対するSoutheyの崇拝は、一般に衆知の事実、あるいは簡単に推論できる事柄であったようである。1801年2月21日に彼は友人に「自分はFox（英国の政治家、英国のアメリカ植民地政策に反対し、フランス革命を終始支持し続けるなど、19世紀の自由主義の先駆者）とNorfolk公の二人に挟まれて、Bonaparteを崇拝している戯画を描かれてしまった[46]」と書き送っている。

**【KublaとNapoleon】**

この時期のNapoleonに対するColeridgeやSoutheyの反応が複雑であることを考慮に入れれば、Rudichによる'Kubla Khan'のナポレオン的解釈は極端に単純化しすぎているようであり、もっと事実に基づいた、根拠のある対抗する見解によってバランスを取られる必要がある。もしKubla＝Napoleonという人物の描写の仕方が、SoutheyがNapoleonにそうして欲しいと願っていたように、Kublaが東方の陽光を浴びながら、あるいは光り輝く高楼の下で自由を確立すると描かれているこの作品の文脈が暗示しているように、肯定的なものであるならば、最終の二行は、たぐい稀な造化のこうした政治的奇蹟を再現させる想像力による手段を提供しているのであろう。この詩に対する二番目の「読み」は、『備忘録』に1802年、Coleridgeが記載した驚くべきイメージ、「玉座、Archimedesの『私に私が立つべき場所を与えよ、然からば私は世界を動かさん』、詩人Bonaparte、世界の楽園の設計者[47]」によって支持される。このイメージは確かに曖昧な所もあるが、終身統領となり、その新しい地位を効果的に利用しうる政治的に有望な、可能性のある人物として、Coleridgeは遅くとも1802年の5月まで、Napoleonを見ていたのだろう。Archimedesの言葉は、Coburnがその注解[48]で述べているようにNapoleonの野望・大望を指しているのだろうが、それを非難するために使われているのでは決してない。むしろ、この言葉はNapoleonが保持している巨大な権力の「崇高さ」と可能性に対するColeridgeの畏怖の念、そしてその権力が善悪どちらに向かって振るわれるのかに対する畏怖の念を表している。つまり、このイメージは、Napoleonが1802年3月25日に英国とアミアン平和条約を締結してから2ヶ月も経たないうちに書かれたのであって、アミアン平和条約締結によってNapoleonの英国内における人気は高まり、フランスと英国との戦争を終わらせたいとのColeridgeの願いがついに実現したからである。

実際に、この時期Napoleonは、Coleridgeが一時的に心に描いていた使命、「もし自分自身を征服者だと想像するならば、今こそ平和をもたらすのに[49]」との使命を実行しているように思われていた。それが実現されれば、'Kubla Khan'に登場する「詩人」と恐らく同じようにColeridgeも「このような想いから背を向け、もっと人の道にかなった、穏やかな夢に向かって進んだ[50]」ことであろう。しかし、Coleridgeは「詩人Bonaparte」であり「楽園の設計者」でもあるNapoleonの中に'Kubla Khan'に登場する二人の人物を統合できる強力な個性を見ていた。この詩の第一連において「きらきら光り輝く楽園」を設計するKublaと、最終連の詩人とを統合する人物である。

Coleridgeの『備忘録』によって、Bonaparteが、たぐい稀な造化の奇蹟、すなわち'Kubla Khan'の政治家としての役目および詩人としての役目を二つ共に具現化してくれるだろうとのColeridgeの想い、願いが見て取れるだろう。

**【二種類の天才】**

タタールの主権者である汗と詩人という対照的な登場人物は、Coleridgeの後の区分、「人を威圧する天才」と「創造的で、何物にも依存しない純然たる天才」との言葉によって今までよく読まれてきている。「人を威圧する天才」とは政治や軍事といった実際的な事柄の世界に姿を現し、「創造的で、何物にも依存しない純然たる天才」は芸術や知性の世界に表れる[51]と、*Biographia Literaria*（『文学評伝』1817年）の中で定義されている。ここでもColeridgeは似たようなイメージを用いている。「人を威圧する天才が静穏であるときは、完璧な詩、すなわち宮殿や寺院や庭園を展覧させたりする。」しかし、*Biographia Literaria* における後の区分を使って、より以前の詩を「読む」ことは'Kubla Khan'に対して、二つの役割という流動的な並置の仕方によって回避されている一定の明確な特性というものを与えてしまうことになる。むしろ、Napoleonの後の経歴がColeridgeにこうした二種類の「天才」における重要な相違点を明確にするよう喚起させたのが実状であったのであろう。もしもNapoleonの経歴の初期においてColeridgeが、「世界の楽園の設計者」である政治家と詩人の二つの役割を統合できる人物としてNapoleonを採択したとしても、Napoleonの後の経歴によって、こうした人物の表象化に疑義が生じ、そのためにColeridgeは政治家タイプの天才と詩人タイプの天才とを弁別しなければならなくなった。1800年の『モーニング・ポスト』でのNapoleonに関する論考において、Coleridgeは「天才」と「人を威圧する天才」との違いを区別してなく、Napoleonを「進取の気性に富み、非凡な才能に恵まれ、そして軍事的経験豊富な人望のある執政官[52]」、「様々な才能を有し、人を威圧する才能に恵まれた、華々しい偉業に包まれた人物[53]」そして「世界で最も偉大な天才[54]」と述べている。しかし、1802年Napoleonが終身統領となり、初期の約束を果たすことが出来そうになくなった頃になると、ColeridgeはNapoleonに「天才」の特性を与えることを拒み始め、「非凡な才能、高貴な家柄そして何ものをも恐れない寛容さ以外のあらゆる点でカエサルであるこの人物[55]」と述べ、天才・非凡な才能という特性を備えた他の人物たちに目を向け始めている。例えば、ColeridgeはToussaint L'Ouverture (1743-1803, ハイチの黒人の軍人・政治家、ハイチ解放者の一人、フランス軍に捕らわれ、フランスで死亡）を、「有徳の点だけでなく、天賦の才能においてもNapoleonよりはるかに優れている英雄[56]」として記述している。1808年、Shakespeareの*Macbeth*の講義の中で、Coleridgeは後の二種類の天才の違いを特徴づけている行動と芸術とに初めて区別を設けている。

> 人を威圧する天才の主な基本要素である望み・願いが、心の平静さを乱し、そのイメージを理解させようと魂を駆り立てる、生き生きとした活発さとまさに同程度の活動的な、他と組み合わされる知性と出会うことで、こうした創造力は大いに増加する。そしてイメージはそれ自体で満足する世界となる、すなわち私たちは詩人となり、独創的な賢人となる[57]。

*Biographia Literaria* およびNapoleonが同時代の「人を威圧する天才」の例として描写されている *The Statesman's Manual*（『政治家のための手引き書』, 1816年出版）の'Appendix C'（「付録C」）におけるこうした定義を発展させて、Coleridgeは詩人の力と政治家の力との分離を完成させ、「創造的で、何物にも依存しない純然たる天才の創造的で自立した力[58]」の方を、「人を威圧する天才の落ち着きの無さや渦巻く活動力[59]」よりも上位に置いている。こうして想像力に富む芸術家の方が政治家や軍人よりも高い位置を占めるようになる。こうした高揚は英国ロマン主義に関

する数多くの論述の中で幾度も述べられてきているが、「湖畔詩人たち（イングランド北西部の湖水地方に住んでいたWordsworth、ColeridgeやSoutheyなどの詩人たち）のNapoleonに対する憎しみ・嫌悪は、ライヴァルとしてのNapoleonに対する彼らの恐怖心および彼らの嫉妬心によって喚起された[60]」とのHazlitt（1778-1830）の示唆は強力な論評となりうるであろう。Hazlittの湖畔詩人たちに対する諷刺は、詩人の想像力は、実際の所、政治家の政治力よりも劣る種類のものである、との意味である。Hazlittの論評によって、「人を威圧する天才」と「創造的で、何物にも依存しない純然たる天才」とのColeridgeの区別の背後には、Coleridge自身あるいはNapoleonのどちらかが詩人と政治家の役割を統合させるとの挫折した望み・願いが横たわっているかも知れない、と思われるのは、果たして考えすぎであろうか。

**【結論：内なる世界へ】**

1790年代後半および1800年代の始めにおけるColeridgeやSoutheyのNapoleonに対する傾倒、そして「非凡な才能の持ち主」、「知識の人」、「賢者」、「詩人」そして「平和の調停者」としての一連の役割のなかでNapoleonを描写していることを検証すると、「架空の人物」としてのNapoleonが二人にとって大変重要であったことが理解される。この時期のNapoleonは、1790年代初めの恐怖政治によって失望させられた政治的望み・願いを蘇らせることが出来る、と大いに期待された可能性のある人物であった。

英国ロマン派第一世代、とくに「湖畔派」によるNapoleonからの離反が始まったのは、従来言われているような1798年の「Napoleonによる」スイス侵攻からではなく、1802年の終身統領就任からであった。1799年の第一執政就任以降は、Napoleonに対するイメージが揺れ動き、「実像」から離れ、「君主制から解放してヨーロッパ諸国に自由と平等をもたらすというフランス革命の大義」を実現してくれる人物、すなわち自分たちに都合のよい、自分たちの望み・願いを託した「虚像」、「架空の人物」を作り上げて、それにしがみついていったのが実情のようである。そうした「悲しい」作業に終止符を打ったのが、1804年の「皇帝Napoleon」の誕生であり、それにより「湖畔派」のほとんどは、外に向かう行動よりも内的な想像力による行為を上位に置くようになった。すなわち自分たちの望み・願いの実現を「他者」に頼ることを止めて、「自己」の中に，すなわち内省を通して詩作品や思索の中に、自分たちの望み・願いを実現させる方向に進んでいったのである。

**註**

1. S. T. Coleridge, *Essays On His Times - in The Morning Post and The Courier.* 3 vols. ed. David V. Erdman (London: Routledge, 1978), I, p. 319.
2. M. H. Abrams, 'English Romanticism: The Spirit of the Age' in *The Correspondent Breeze: Essays on English Romanticism* (New York: Norton, 1984), p. 47.
3. *Ibid.,* p. 66.
4. M. H. Abrams, *Natural Supernaturalism: Tradition and Revolution in Romantic Literature* (New York: Norton, 1973), p. 328.
5. Stephen Prickett, ed. *England and the French Revolution* (London: Macmillan Education, 1989), p. 19.
6. *Natural Supernaturalism, op.cit.,* p. 339.
7. *The Poetical Works of William Wordsworth,* second edition. 5 vols. ed. Ernest de Selincourt (Oxford University Press, 1952-59), III, p. 454.
8. David Erdman, *Blake, Prophet against Empire: A Poet's Interpretation of the History of his own Times* (Princeton University Press, 1954), p. 280
9. Carl Woodring, *Politics in the Poetry of Coleridge* (Madison: University of Wisconsin Press, 1961), p. 25.
10. Carl Woodring, *Politics in English Romantic Poetry* (Harvard University Press, 1970), p. 14.
11. J. C. Maxwell, 'Wordsworth and the Subjugation of Switzerland', *Modern Language Review,* 65, I (January 1970), pp. 16-18.
12. *Ibid.,* p. 18.
13. Charles Cuthbert Southey, ed. *The Life and Correspondence of the Late Robert Southey.* 6 vols. (London: Longman, 1850), I, p. 180.

14. Allan J. Bewell, 'The Political Implications of Keats's Classicist Aesthetics', *Studies in Romanticism,* 25, 2 (Summer 1986), p. 225.
15. *New Letters of Robert Southey.* 2 vols. ed. Kenneth Curry (Columbia University Press, 1965), I, p. 185.
16. *Ibid.*
17. Jerome J. McGann, *The Romantic Ideology: A Critical Investication* (Chicago University Press, 1983), pp. 101-4.
18. Ibid.
19. Geoffrey Carnall, *Robert Southey and his Age: The Development of a Conservative Mind* (Oxford: Clarendon Press, 1960), p. 478.
20. *New Letters of Robert Southey, op. cit.,* II, p. 21.
21. Geoffrey Carnall, *op. cit.,* p. 55.
22. Charles Cuthbert Southey, *op. cit.,* II, p. 26.
23. *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge.* 6 vols. ed. Kathleen Coburn (Oxford: Clarendon Press, 1956-71), I, no. 294.
24. Charles Cuthbert Southey, *op. cit.,* II, p. 26.
25. *Essays On His Times, op. cit.,* I, lxxxvi.
26. *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge, op. cit.,* I, no. 298.
27. *Essays On His Times,* op. cit., I, p. 201 and pp. 219-26.
28. *Ibid.,* I, xci.
29. *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge, op. cit.,* I, no. 306.
30. Charles Cuthbert Southey, *op. cit.,* II, p. 44.
31. *Ibid.,* II, p. 46.
32. John Colmer, *Coleridge: Critic of Society* (Oxford: Clarendon Press, 1959), pp. 54-71.
33. *Essays On His Times, op. cit.,* I, p. 71 and p. 85.
34. *Ibid.,* I, p. 88.
35. *Ibid.,* I, pp. 210-11.
36. *Ibid.,* I, p. 211.
37. *Ibid.,* I, xc and pp. 212-16.
38. *Ibid.,* I, pp. 76-79.
39. David V. Erdman, 'Coleridge as Editorial Writer' in *Power and Consciousness,* ed. Conor Cruise O'Brien and William Dean Vanech (University of London Press; 1969), p. 190.
40. *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge.* 6 vols. ed. Kathleen Coburn (New York: Pantheon Books, 1957-73), I, no. 651.
41. *Ibid.*
42. *New Letters of Robert Southey, op. cit.,* I, pp. 221-22.
43. *Ibid.,* I, p. 222.
44. *Essays On His Times, op. cit.,* I, p. 221.
45. *Ibid.,* I, pp. 208-09.
46. Charles Cuthbert Southey, *op. cit.,* II, p. 134.
47. *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge, op. cit.,* I, no. 1166.
48. *Ibid.*
49. *Ibid.,* I, no. 1214.
50. *Ibid.*
51. Samuel Taylor Coleridge, *Biographia Literaria or Biographical Sketches of my Literary Life and Opinions.* 2 vols. ed. James Engell and W. Jackson Bate (London: Routldge, 1983), pp. 31-33.
52. *Essays On His Times, op. cit.,* I, p. 88.
53. *Ibid.,* I, p. 208.
54. *Ibid.,* I, p. 310.
55. *Ibid.,* I, p. 399.
56. *Ibid.,* II, p. 766.
57. Samuel Taylor Coleridge, *Lectures 1808-1819 on Literature.* 2 vols. ed. R. A. Foakes (London: Routledge, 1987), I, p.137.
58. *Biographia Literaria, op. cit.,* I, p. 31.
59. Samuel Taylor Coleridge, *Lay Sermons.* ed. R. J. White (London: Routledge, 1972), no. 137.
60. *The Complete Works of William Hazlitt.* 21 vols. ed. P. P. Howe(London: J. M. Dent, 1930-04), XVI, p. 245.

## 主要参考文献


J. ゴデショ『フランス革命年代記』(日本評論社、1989年)

J. P. ベルト『ナポレオン年代記』(日本評論社、2001年)

両角良彦『反ナポレオン考』(朝日新聞社、1991年)

両角良彦『東方の夢』(朝日新聞社、1992年)

両角良彦『1812年の雪』(朝日新聞社、1993年)

両角良彦『セント・ヘレナ落日』(朝日新聞社、1994年)

Harriet Ritvo, *Macropolitics of Nineteenth-Century Literature* (Durham: Duke University Press, 1995)

James D. Wilson, *The Romantic Heroic Ideal* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1982)

Renee Winegarten, *Writers and Revolution* (New York: New Viewpoints, 1974)

H. M. Jones, *Revolution & Romanticism* (The Belknap Press of Harvard University Press, 1974)

J. R. de J. Jackson, ed. *Coleridge: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1970)

J. R. de J. Jackson, ed. *Coleridge: The Critical Heritage Volume 2: 1834-1900* (London: Routledge, 1991)

John Cornwell, *Coleridge: Poet and Revolutionary*

*1772-1804: A Critical Biography* (London: Allen Lane, 1973)

Molly Lefebure, *Samuel Taylor Coleridge: A Bondage of Opium* (London: Victor Gollancz, 1974)

R. L. Brett, ed. *Writers and their Background: S. T. Coleridge* (London: G. Bell & Sons, 1971)

John Colmer, *Coleridge: Critic of Society* (Oxford: Clarendon Press, 1959)

Nicholas Roe, *Wordsworth and Coleridge: The Radical Years* (Oxford, Clarendon Press, 1988)

Lionel Madden, ed. *Robert Southey: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1972)

C. M. MacLean, *Born under Saturn: A Biography of William Hazlitt* (London: Collins, 1943)

David Bromwich, *Hazlitt: The Mind of a Critic,* (Oxford University Press, 1983)

# The First Generation of the English Romantics

## — On Coleridge's and Southey's Views of Napoleon Bonaparte —

TAKAHASHI Masami

### Abstract

On the first generation of the English Romantics, previous studies have concluded that their fervent affections that Napoleon was the figure who could liberate Europe from its monarchial system and who could embody the French Revolution's noble causes or ideas of liberty, equality and philanthropy, were miserably broken to pieces by the French invasion of Switzerland 'commanded by Napoleon' in 1798, and that thereafter they began to have no concern for Napoleon. But after inspecting the first generation of the English Romantics, particularly focussing on Coleridge and Southey, it is confirmed that their affections to Napoleon were swaying till his new position as Counsul for Life in 1802, or till his accession to Emperor after that, and that they got estranged from Napoleon's 'real figure', conveying their own hopes in 'an imaginary figure' as Napoleon that their affections had fabricated.

key words : Coleridge, the English Romantics, the French Revolution, Napoleon Bonaparte, Southey